カラー版

フランダースの犬

ウイーダ作　前田三恵子訳

全国学校図書館協議会選定図書

旺文社ジュニア図書館

フランダースの犬

ウィーダ作　前田三恵子訳

旺文社ジュニア図書館

〈編集委員〉　五十音順

白木　茂（日本児童文芸家協会常任理事）
滑川道夫（東京教育大学講師・日本児童文学学会常任理事）
波多野勤子（日本児童研究所長・文学博士）
福田清人（立教大学教授・日本児童文芸家協会理事長）
山室　静（日本女子大学教授・日本児童文学学会常務理事）

月光は高窓ごしにルーベンスの絵をてらしていまし
をさしのべました絵のほうへ手をさしのべました。

もくじ

フランダースの犬

1・小さいネルロと大きいパトラッシェ　9
2・仕事もふたりいっしょに　25
3・ネルロのゆめ　33
4・風車の家のむすめアロア　51
5・ネルロの秘密　70
6・風車の家の火事　77
7・小屋をおわれて　86
8・かなしいクリスマス・イブ　97
9・天国でしあわせに　104

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

七面鳥のメレアグリス・ガロパボ

1・きれいな七面鳥とみにくいぶた　119

2・森のなかの動物たち　127

3・七面鳥のさいご　137

かいせつ

まとめ　145

作者について　150

「フランダースの犬」を読んで

パトラッシェは七十四歳　小林清之介　154

名作「フランダースの犬」の主題　佐藤義美　157

少年と犬の友情　室生朝子　160

父母・先生がた・研究者のページ

作者と作品　163

鑑賞指導　170

これからの読書指導　174

あとがき　175

絵・武部本一郎

フランダースの犬

読むまえに

「フランダースの犬」のお話は、ベルギーのフランダースという地方にすむ老人とその孫の子どもと犬のさんにんの愛の物語です。

老人はジェハン・ダースといって、わかいころ兵隊にでて、びっこになったまずしい農民で、子どもはネルロといって、みなしごでした。心のやさしいダースじいさんにそだてられて、ネルロはすなおな、うたがうことを知らないうつくしい心の子どもになりました。

そのふたりが、ある日、死にかかっている犬のパトラッシェを見つけます。そして、てあつくかんびょうして生き返らせます。犬はその恩に感謝して、老人と子どものために、死ぬまで献身的な愛をささげます。

おじいさんが死んだのち、無情な世間に、少年と犬は愛と信仰心を失わず、つよく生きぬこうとしますが、ついに力がつきて、あこがれのルーベンスの絵をあおぎながら、教会堂のつめたい石だたみの上で命をおわります。少年と犬のかぎりなくうつくしい友情と、力よわいものの無情な世間への抗議をこのかなしい物語からじゅうぶんあじわって読んでください。

1　小さいネルロと大きいパトラッシェ

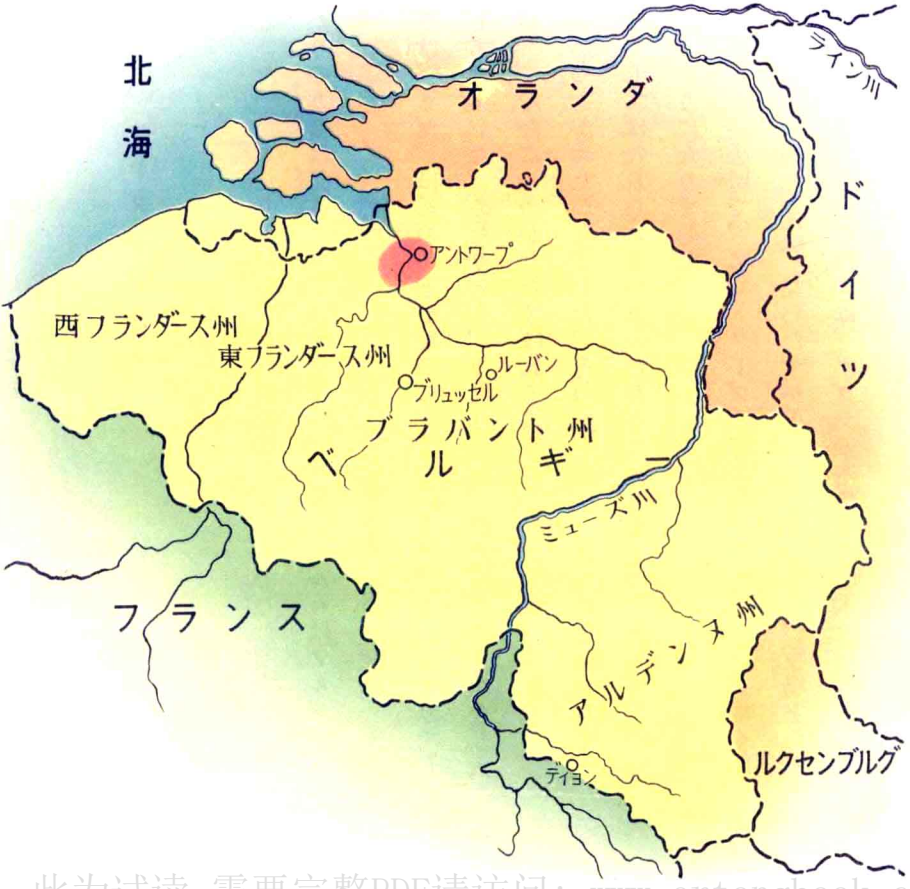
ネルロとパトラッシェは、みよりのないたったふたりだけの、かわいそうな身の上でした。ふたりは、ほんとうに仲のよい友だちでした。ふたりの友情は兄弟よりもこまやかでした。ネルロはアルデンヌ（フランス北東部ベルギー南東部の国境にちかいミューズ川にそった地方）生まれの少年で、パトラッシェはフランダース生まれの大きい犬でした。ふたりはおない年でした。でも、少年のほうは、まだ、ほんの子どもなのに、犬のほうは、もう年よりでした。ふたりは、いつもいっしょにくらしてきました。ふたりとも、みなしごで、びんぼうで、おなじ人にそだてられました。ふたりの気もちが、こんなにしっかりむすばれるようになったのは、ふたりが、おたがいに同情し、いたわりあう気もちがつよかったからでした。その気もちは、日がたつにつれて、ますます、つよくなって、ふたりは、けっしてはなれられないあいだがらになりました。そして、ついには、おたがいに、心のそこから愛しあうようになりました。

ふたりがすんでいる家は、小さいみすぼらしい小屋で、アントワープの町から、五キロメートルくらいはなれた小さい村のはずれにありました。そのあたりは、見わたすかぎり、ひろいひろい牧場とむぎ畑でした。牧場やむぎ畑のあいだをながれる大きい運河の岸には、ポプラの木やはんの木のなみ木があ

って、そよ風にさやさやとうたっていました。

村にある家の数はすこしでした。ふつうの家と農家とぜんぶあわせても二十けんくらいしかありません。どの家にも、あかるい緑色や空色のよろい戸がついていて、家の屋根は、ばら色か、黒と白のふた色にぬられていました。そして、しっくいのかべは、陽の光をうけて、雪のように白くかがやいていました。

村のまんなかに、こけがいっぱいはえている小さい丘があってその上に風車がたっていまし



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た。その風車は、見わたすかぎり畑ばかりのこのあたりでは、目じるしになっていました。風車は、むかしは、つばさのところも、胴のところも、もえるような赤でぬられていました。でも、それは、その風車がつくられたころのことで、半世紀か、それいじょうもふるいむかしのことです。

そのころ、その風車は、ナポレオン（一七六九年～一八二一年、フランスのゆうめいな皇帝）の兵隊たちがたべたこむぎをひいたこともありました。風車は、長いあいだ、雨や風にさらされて、いまでは赤茶色になっていました。車のうごきぐあいもにぶくなっていました。でも、ときどき、元気だったむかしを思いだしたように、いきなり、いきおいよくまわることもありました。そんなぐあいでその風車は年よりになって、リューマチにかかったため、ふしぶしがこわばってしまっているというかんじでした。

でも、その風車は、まだまだ、近所にすんでいる人たちの役にたっていました。だから、近所の人たちは、自分たちのこむぎをどこかほかの風車小屋へはこんでいって、ひいてもらうのは、とてもわるいことだと考えていました。そんなことをするのは、自分たちの村の教会のミサ（教会でするいちばん大切な儀式）に出席しないで、ほかの

教会のミサにでかけていくのとおなじくらい、不義理なことだと考えていたからです。

風車のむかいがわに、円錐形の尖塔のついたはい色の小さい古い教会がたっていました。教会には鐘がたった一つあって、その鐘は、オランダやベルギーやルクセンブルグ地方にいけばどこででもきかれるふしぎな、さびしい、うつろな音色で、朝に昼に夕べになりひびきました。

ネルロとパトラッシェは、まだ、ほんの子どものころに、その小さい、かなしい鐘の音のきこえるその村にひきとられました。そして、村のはずれにあるそまつな小屋で、ずっといっしょにくらしてきたのです。小屋のまわりには、緑の草原とこむぎ畑が、しおのみちひきのない変化のない海のように、はてしなくひろがっていました。そして、はるか東北の空には、アントワープの町の大教会堂の尖塔がたかくそびえていました。

ネルロとパトラッシェがすんでいる小屋は、ジェハン・ダースという、とてもまずしい年よりの小屋でした。ジェハン・ダースじいさんは、わかいころは兵隊でした。それで、ちょうど、おうしが畑のあぜみちをふみつぶすように、ベルギーの国をふみつぶしてしまった戦争のことを、いまでもよくおぼえていました。じいさんが戦争にかりだされて、はたらいたかわりにもらってきたおみやげといえば、足のきずだけでした。そして、じいさんは、そのきずのために、一生びっこになってしまいました。

ジェハン・ダースじいさんが、満八十歳になったとき、スタブローの近くのアルデンヌにすんでいたおじいさんのむすめさんが死にました。むすめさんは、たった二歳になる男の子を、おじいさんに、わ

すれがたみとしてのこしていきました。おじいさんは、自分ひとりのくらしをたてていくのもやっとでした。けれども、おじいさんは、ひとことも不平をいわないで、赤んぼうというやっかいなおにもつをひきとりました。でも、まもなく、その子どもは、おじいさんにとって、かわいい大切なたからものになったのです。

小さいネルロ（ニコラスという名の愛称）はおじいさんの手もとで、元気にそだっていきました。おじいさんとネルロのふたりは、まずしい小屋で、まんぞくして、くらしていました。

その小屋は、白いねんどでまわりをぬりかためただけの、ほんとうにみすぼらしい小さい小屋でした。でも貝がらのように、せいけつで、まっ白でした。小屋のまわりには小さい畑があって、いんげん豆や薬草やかぼちゃなどがとれました。

ふたりは、とてもびんぼうでした。ほんとうにひどいびんぼうで、たべるものが一つもない日が、いままでに、なん日もありました。たっぷりたべものがあったことなど、ただの一日だってありませんでした。だから、もし、おなかいっぱいたべられるようなことがあったら、ふたりは天国にのぼったような気もちになったことでしょう。

けれども、おじいさんは、ネルロにとてもやさしくて、しんせつでした。ネルロはうつくしくて、むじゃきで、正直な、心のやさしい子どもでした。ふたりはひと切れのパンや、二、三まいのきゃべつがあるだけでも、自分たちはしあわせなのだと思って、それいじょうは、この世のしあわせも、あの世の

しあわせものぞもうとしませんでした。ただ、犬のパトラッシェさえ、いつも自分たちのそばにいてくれればとだけいのっていました。じっさい、パトラッシェがいなくなったら、おじいさんも少年も、どうしてくらしをたてたらよいのかわからなかったからです。

パトラッシェは、おじいさんと少年にとって、すべてでした。ふたりにとって、パトラッシェは宝庫であり、穀物倉であり、金庫であり、富をうみだす魔法のつえでした。そしてまた、一家のかせぎ手であり、めしつかいであり、かけがえのない友であり、なぐさめ手だったのです。

もし、パトラッシェが死んだり、あるいは、どこかへいってしまったりしたら、おじいさんも少年も死んでしまったにちがいありません。つまり、パトラッシェは、ふたりにとって、からだであり、頭脳であり、手であり、足であったのです。パトラッシェは、それこそ、ふたりの命、ふたりのたましいそのものだったのでした。というのは、ジェハン・ダースじいさんは、年よりで、おまけにびっこだったし、ネルロはまだ、小さい子どもだったからです。そしてパトラッシェは、おじいさんとネルロふたりの犬でした。

フランダースの犬は、からだの毛は黄色で、頭と四本の足は大きくて、耳はオオカミの耳のようにぴんとたっていました。それは、とおい先祖のむかしから、なん代もなん代もはげしい労働によってきたえられてきた種族でした。だから、筋肉はたくましくはったつし、弓形にぐっとそりかえった足は、しっかりと大地をふんまえていました。パトラッシェは、親から子へと、なん世紀にもわたって、フラン

ダース地方で、なさけようしゃのないはげしい労働にこきつかわれてきた種族の子孫でした。つまり、人間にめちゃくちゃにこきつかわれて一生をおくるどれいのなかのどれいといったものでした。かじぼうと引き具にしばりつけられ、一生がい、車のすりきずにくるしみながら、からだをむりやりつかわされて、ついには心臓がやぶれて、道路のかたい石の上で、のたれ死にする運命に生まれついた犬だったのです。

パトラッシェの親は、とがった石をしきつめた道路や、東フランダース州、西フランダース州、ブラバント州などの日かげ一つない、うんざりするような長い道を、荷車ひきの犬として、一生がい、歩きつづけました。パトラッシェがこの両親からうけついだものは、荷車ひきの犬というつらい運命だけでした。生まれおちたときから、パトラッシェはまいにち、どなりつけられ、ぶんなぐられながらそだてられました。けれども、それもしかたがないのです。パトラッシェが生きているところは、人間の国であって、パトラッシェはただの犬にすぎないのですから。

パトラッシェは、いちにんまえにならない小さいころから、荷車の引き具のひりひりするすりきずと、首輪のいたさを知らされました。生まれて十三か月にもならないうちに、パトラッシェは、ある金物商人のもちものになりました。その金物商人は、北から南へ、青い海から緑の山へと、商売をしながらいつも国じゅうをあちこちと旅していました。パトラッシェは、そのころ、まだ、ほんの子犬だったので、とてもやすい金で、その男にうりわたされたのです。

その男は、のんだくれで、けだもののようなざんこくな心の男でした。だから、パトラッシェのまいにちは、まるで地獄のくらしでした。人間のなかには、動物たちに、へいきで地獄のくるしみをなめさせるむじひな人がいます。そういう人たちは、そんなやりかたで、「わたしは、この世のなかに地獄というものがあるのを信じていますよ。」と語っているようなものです。

パトラッシェをかいとったその男は、いつもふくれっ面をしていて、くらしむきのよくない、氷のような心をもったブラバント生まれの男でした。男は、つぼやなべや、細口びんやバケツ、それから、せとものやしんちゅうやブリキ製品などを山のようにつみあげた荷車を、パトラッシェに力のかぎり引かせました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com